



三井高利(宗寿)着用の衣類(十徳、丸頭巾、沓足袋)

口絵 三井高利着用衣類

三井文庫では、本年十二月八日、十日の三日間、第五回史料展示会「没後三百年 三井高利展」を開催した。三井高利は言うまでもなく、三井事業の創始者であり、一代で財をなし、家と事業の永続性を次代に託して元禄七年（一六九四）五月に没した。展示会はその三百年回忌を記念したものである。展示内容は、家産共有制の発端となる遺言状、宗竺遺書をはじめ、松坂居住時代の帳面類、高利夫妻の書翰、遠祖縁戚関係、高利を支えた子供達による創業時の帳面類その他関連史料ならびに遺物類など創業過程を跡付ける貴重なものばかりである。

高利関係の史料は三井各家に伝来しており、非公開のものが多い。これより以前昭和十八年に行なわれた三井家主催の「二百五十回遠忌記念展」で展示されたことがあるが、今回ごく一部の史料を除けば五〇年ぶりに展示公開されたことになる。

口絵写真は三井高利愛用の衣類で、高利没後一六年経た宝永七年（一七一〇）六月、当時の八郎右衛門、すなわち高利三男高治（新町三井家初代）から重鎮手代の中西宗助に贈られたものである（中西自身は「拾七年後」とメモ書している）。丸頭巾の表地は濃茶色の縮緬で、今や粉状劣化しつつあるが、裏地は白絹紬で比較的しっかりしており、かろうじて原型を止め得ている。十徳は黒色の絹緞子で、寸法は身丈二尺五分、袖丈一尺二寸五分、裾一尺七寸二分、前身巾八寸、後身巾九寸、衿巾一寸九分。また沓足袋は足袋の上から穿くもので、足の踝の下までをすっぽり包み込む形になっている。表地は足袋底と同じ雲斎織、裏地は羽二重の綿入で、甲の部分を紐で結ぶようになっている。足袋底の外寸は縦巾二九・五センチメートル、最大巾一五センチメートルと大きい。ちなみに高利の足袋は十文三分（約二四・七センチメートル）である。

着類の遺品は中西の他、小林善次郎の家にも伝えられたものがある。彼らが拝領を受けた宝永七年は三井家にとって家と事業を統轄する機関、大元方の設置された年でもあり、創業期からの功績と大元方設置に尽力した兩名への代償であったかと推測される。中西、小林両家の宝物として伝わったこれらの品々は、ある時期に再び三井家の手に戻り、三井家の家宝となった。